

「＜断絶＞埋める試み ―

東日本大震災と人権学習」

うち だ りゅう し
内 田 龍 史 (尚綱学院大学教員)

2011年3月11日に起きた東日本大震災の特徴は、太平洋沿岸部をおそった大津波である。多くの方々の尽力により、現在、津波の被害を受けなかった地域ではほぼ以前の暮らしを取り戻しつつあるが、被害を受けた地域の復興はいまだままならない。それに加えて、計り知れないのが精神的なダメージである。ふるさとや家、仕事だけでなく、目の前で多くの方々の命が失われたという経験をしている人は多い。

そんななかでいま、学生とともに大学のある名取市の震災復興に関する調査を実施しつつある。しかし、こうした被災地を対象とする調査で浮かび上がるのは、被災者としてでない者としての＜断絶＞である。被災された方々にとっては嫌な、思い出したくもない体験を聞かれることになるため、安易に被災地を調査

して欲しくない、被災のことを簡単に考えて欲しくないという当事者の声が聞かれる。

とはいえ、阪神・淡路大震災のみならず、原爆・戦争・公害・被差別体験などに共通して言えることだが、苦難を受けた人はその痛みを忘れるのではなく、痛みと共に生きていくことになる。であるならば、そうした痛みは皆で共有できた方がよい。そのためには、当事者でなくとも共感的に理解しようとする人々が多い方がよい。

最も問題なのは、忘却と無関心であろう。そうさせないがために、自分の痛みを見つめつつも、語り部の方々は多くの人々に自分の経験を語り伝えてきた。また、阪神・淡路大震災の震災モノUMENTや、ヒロシマの原爆ドームなど、亡くなられた方々の生きた証を共に記憶する試みも重要である。その前提となるのは、人々の経験や想いを丁寧に明らかにし、発信していく取り組みである。

経験のちがいによる＜断絶＞は確かに大きい。しかし、そうした＜断絶＞を少しでも埋めるような試みは、これまでの人権学習や人権問題学習においても培われてきたはずである。そうした実践が広がることを願うとともに、私もその一端を担いたい。